

村山 簗子の童話に潜む反権力精神の要因の背景について

橋本 外記子 (聖和大学大学院)

(高知大学教育学部教育実践センター研究員)

1. はじめに

江戸末期、高松藩士であった簗子の祖父岡内喜三は、明治移行への廃藩にともない、高松市において漢方薬製造販売業岡内勸弘堂を創業し、明治・大正・昭和の始めにかけ“岡内家伝の千金丹”として全国津々浦々に売り歩く商法で一世を風びした企業家である。

簗子は、岡内勸弘堂二代目社長徳次郎と寛を両親に、裕福で知的で先進的家庭の10人兄弟姉妹の長女として1903(明治36)年11月7日誕生、養育された。(一歳に兄三がいた)香川県高松市の高等女学校卒業後上京し、創立されたばかりの自由学園高等部に学び、1923年卒業と同時に『婦人之友』社(1903年創刊)の記者となる。かたわら、童話・童謡を、『子供之友』(1914年創刊)、『コドモノクニ』(1922年創刊)に1940年まで発表し続けた。

1922年に東大を中退しドイツに留学した村山知義は、1923年に帰国後、前衛美術集団マヴォを結成し、画家・舞台演出家・舞踊家・作家・脚本家等多彩な才能を発揮し活躍する。1924年に簗子と結婚すると、簗子の童話と知義の斬新で個性的な挿絵との協力で当時の幼年童話界に新風を注ぎ、新鮮で希有な存在であり続けた。

彼女の創作上の特徴は、童話の主人公が擬人化され、動植物を通して人間の本质に迫っていること。子どもなりの世界や思考があることを尊重し、自由な子どもの遊びや生活を温かく見つめていること。社会の風潮を真っすぐに見つめ、密かに反権力精神を作品の中に潜ませていることである。作風はモダンでユニークで、あっけらかんとしたナンセンス話であり、ウィットに富みユーモアに満ちている。擬人化した動物や植物、家具道具等のくりだすドラマは、当時の芸術運動の先駆けであった幼年雑誌『赤い鳥』(1918年創刊)の掲げる童心主義思想にも属さず、教訓話でもなく、当時の既成児童文学とは異質の世界を子どもたちにもたらし独特の児童文化である。それらは70年以上経た現代にも十分通じており、むしろ現代にふさわしいものと言える。

簗子は職業婦人・童話作家として活躍するが、戦争へと進む重苦しい社会状況の中、知義ら社会主義者が治安維持法違反で時の政府から徹底的に弾圧、投獄されると、夫や仲間の救援活動を続けた。しかし結核のため1946年8月4日に鎌倉の疎開先で42歳で他界した。大正から昭和初期に児童文学・文化運動を続けながら、

社会変革へ凜と立ち向かった女性のひとりである。大資本家のモダンで知的な欧風生活を営む家庭に育ち、ミッション系高等教育を受た簗子の反権力精神の要因にはどのような背景があるのかを探り、検討を試みる。

2. 童話に潜む反権力精神

簗子の童話は、拳を振り上げ声高に反戦・反権力を叫ぶものではなく、むしろナンセンス・ユーモア話でオブラートされており、一見オプチミズム的な作風に読者によっては“微笑を誘われるだけ”であろう。確かに“それだけのもの”も多いが以下に例を上げる。

童話創作初期、23歳のときの作品、『リボンときつねとごむまりと月』[1926(大正15)年、「子供之友」7月号、婦人之友社]は、我が物顔に権力を振りかざすきつねに対して、リボンと月とごむまりとが思索を凝らして立ち向かう様子を、簗子特有の感性と知性によって柔らかに描いている。

26歳のときの創作童話、『ライオンの大損』[1929(昭和4)年、「子供之友」10月号、婦人之友社]では、百獣の王として森中の動物を統制するライオンは、ある日、鬣を紛失し狼狽する。鬣を無くしたとたん、どの動物も自分を恐れなくなり、鬣が権威の象徴であったことを思い知る。古物屋から高額な鬣を買い取るが、既に新しい鬣が生えており大損をしたという架空の権威を痛切に批判し、からかう話をおどけた軽妙な筆致でユーモラスに語る。

27歳のときの作品『ゾウ ト ネズミ』[1930(昭和5)年、「子供之友」6月号、婦人之友社]では、体の大きいゾウが小さいネズミをいつも支配しているが、あるときネズミから取り上げた双眼鏡を逆さまに見て、ネズミが如何に大きい動物であるかと勘違いし、驚き恐れるという話である。

“大きいものが権力者”というステレオタイプ思考を簗子らしい無邪気さとユーモアとウィットで批判する。

『おねこさんと きのこのくつ』は創作時・初出誌ともに不明である。1933(昭和8)年頃からは 児童文学界も国家統制下におかれ、自由に執筆できず、別名での創作発表が続いたことも不明の原因のひとつである。

欲張り町長は、クモ夫婦の持つ「金の靴」を譲ってもらい一儲けするため、使者としてぼんやり猫に立派な服、靴、ステッキ、帽子で身づくろいさせ、電信柱に押し上げる。猫は着慣れない服が邪魔で、上る途中、全部脱ぎ捨て、やっと着いた時、猫は何の用事だった

のか忘れて笑い転げたため、地上へ真逆さまに落ちるが、なお笑い転げるという話である。猫の“笑い転げる”という行為は、権力者の町長や立派な服装で紳士面する偽善者の権威を笑い飛ばすという痛烈で鋭い風刺であり、とぼけた口調でユーモラスに書いている。

『ゴボウ君と大根君』[1938(昭和13)年『コモノ』2月号]は、簗子36歳のときの作品である。友情や人種差別の問題を、理屈や説教や他者の介入があっても“そんなことたいした問題でもないさ”というように悲劇的な場面をもユーモラスにからりとした筆致で書きすすめ、建前やお仕着せの倫理観を“フン”と笑い飛ばす。

紙数の都合で5例を簡単に挙げた。このように反権力精神の潜む作品は他にも見られる。その要因は、彼女の生育以前から培われてきたものと思われる。

3. 反権力精神の要因の背景

簗子の生家、薬製造販売業岡内勸弘堂は、本年創業127年を迎える。創業者岡内喜三は下級武士であった。明治維新に風呂屋を開業。やがて漢方薬(千金丹)の製造秘法を手に入れ、今様のフランチャイズチェーン組織して派手な宣伝で全国各地に売りさばき、巨額を手中にした。成功の原因は喜三の営業力にもよるが、それ以上に妻タカの経営的手腕が貢献している。当時としては早くも会社組織にして、分業・流れ作業式製造工程・新しい賃金体系・朝礼もあり、歌声もあふれるなど、楽しい職場作りと経営管理のアイデアを取り入れて、円滑な製造販売へと改革したのはタカである。

一人娘の寛には家業継続のため、最高学府の千葉薬専(現在の千葉大学薬学部)出身の徳次郎を養子に迎えて結婚させた。寛は当時の良家の子女の稽古ごとには興味を示さず、早くから英語・乗馬・絵画・水泳・洋裁・西洋料理・手芸などに熱中した。講師は東京から招き、徹底的な個人指導であった。9歳のときから会社代表として役所や関係機関へ文書発行もしている。

徳次郎は、新薬開発の一方、外国薬品や化粧品を輸入し、パン・ケーキ販売や喫茶併設のドラッグストアも開設する。権力に頭を下げることを嫌い、特に役人、警察等権威者には対抗意識を持ち、政治にも関係した。

当時では時代の先端を行く家庭に育った簗子である。乗馬こそしなかったが、毎夏、大の場海岸で男性に交じって武士泳法の水任流を習い水泳教師の資格も得る。当時の女学校は徹底的な良妻賢母教育であり「人前で肌を見せる水泳は禁ずる」と、校長に寮に入れられる。

良家の子女が自立し恋愛結婚をするなど一般に許さ

れぬ時代。ドイツ帰りの前衛画家、長髪でルパシカ姿の村山知義との結婚は、戸主喜三から強く反対され勘当を申し渡されるが、簗子の学び舎の自由学園講堂での友人たちの手作り結婚式には、両親の徳次郎・寛も快く出席している。結婚を自由学園長羽仁女史に告げたとき、「彼と結婚すると苦しいよ」と言われ、簗子は「私は苦しむために結婚するのです」と反論する。

簗子は知義の児童画には感服していたものの演劇等の作品には鋭く批判し、彼も簗子の論評眼に脱帽する。知義の浮気の噂には徹底的に彼を「無視」で批判した。

息子の亜土の学校教育でも天長節や明治節の式典は欠席させ、チャプリンの『モダンタイムズ』等の映画を見せた。入学式、父兄会、卒業式も出席しなかった。

知義ら社会主義者が治安維持法違反で収監されると、彼らの支援にまわる一方、仲間たちの秘密の連絡係を注意深く忠実に続けた。特高が度々家宅捜査をしたが、簗子は毅然と対応し、「後片付けをせよ」と一喝した。

戦時中の度々の空襲に、高松の実家へ「空襲時にはバケツリレー等バカなことはせずすぐ逃げる。何よりも命が大事」と大胆にも書き送り、そのため実家では焼死を逃れたが当時では大変な問題文書であった。

知義の母は熱心なクリスチャンで、貧者への施しを度々した。「そんなことをしても世の中から貧者はなくなる。神に認められるためのエゴイズムだ」とその行為を批判した。神への祈りで社会変革はないと。

終戦後、アメリカのマッカーサー元師が来日したとき、「これで我々は自由に活動できる」と知義が喜ぶと、「アメリカを解放軍と思ったら間違いよ。支配者よ」と簗子は言う。確かにその通りになったと亜土は回想する。東京の大出版社から原稿依頼があったときにも、「戦争中に戦争に協力したところには書かない」と断固拒否する。高い稿料であっても決して筋を曲げない簗子であった。いずれも死の数か月前のことであった。

4. おわりに

いつの時代でも、最も人間らしいびちびちした理性と情感をもつ者は、柔軟で強い意志で歴史を生きる。

簗子の反権力精神は当時の時代背景から考察すると、最も先端を行く斬新な行為と思想であるがゆえに世間や時の政府からは爪弾を受け糾弾された。だが彼女は童話にも独特の個性と知的ユーモアとウィットと柔軟軽妙な語り口で、純粋な自我主張を潜めた。その精神は祖父母や父母の先進性を継いでおり、特にタカや寛の柔軟で理性的自己確立の生き方に学んだと思われる。

参考文献(1)村山知義『演劇的自叙伝』1. 2. 3. 4東邦出版社1970~77 (2)『ママのお話』童心社1966 (3)『岡内家伝』及び岡内家古文書 (4)村山亜土『母と歩く時』JULA出版局2001